立正大学社会福祉研究所年報　第21号（2019）222～226

〈報　告〉

立正大学社会福祉学部子ども教育福祉学科　板野　晴子

先の【研究会報告】では，2017年度，2018年度のプロジェクト「研究対象としての人間のとらえ方をめぐって――本学部の研究・教育のアイデンティティと独自性の確立と特色づくりに向けて――」のテーマの下で行った「幼児教育・学校教育へのリトミック受容の一端」の発表内容を纏めた。2018年度はこのテーマの継続的研究を日本ダルクローズ音楽教育学会からの委嘱論文として研究誌に掲載することとなった（日本ダルクローズ音楽教育学会『ダルクローズ音楽教育研究　創立45周年記念号』通巻第43号，pp. 1 －12）。プロジェクト研究の成果としてその概要をここに報告する。

［要　旨］

日本のリトミック教育研究の歩み
――受容史の研究動向を中心に――

History of Eurhythmics education Research in Japan
――Research Trends in the History of Accepting Eurhythmics as a Method of Music Education――

はじめに

平成の終盤を迎え，Ｊ＝ダルクローズが創案したリトミックが日本に導入されてから既に100余年が経過している。現在，我が国におけるリトミックの実践は，幼児教育，学校教育，障がい者の活動への適用に留まらず，様々な場面に採り入れられるようになってきており，その活用の場は拡大している。

今般，学会発足45周年[(1)]を記念して「日本のリトミック教育研究の歩みを俯瞰する」特集が組まれることとなった。筆者はこの数年，リトミックの導入史の考察を継続してきた。このテーマを与えられたのを機に，本稿では，日本へのリトミック教育の受容史の研究動向を捉えていくことにする。歴史的研究の領域から，本稿がリトミック教育研究の歩みを俯瞰し，今後の発展の礎となればと考える。

１．研究の目的と方法

研究の目的は，明治，大正，昭和時代にかけて日本に導入されたリトミックの受容史研究の動向を明らかにすることにある。

方法は，先行研究でなされていた受容年表をもとに，新たに明らかになった事項を加え，

これまでの歴史的研究の時代・分野ごとの分類を行う。また，「国立国会図書館サーチ」（NDL Search）にて論文検索を行い，日本へのリトミック受容の歴史的研究論文を抽出していく。

選出対象は，楽譜紹介，書評，研究ノート，記録，口頭発表要旨等を除き，学会誌または研究機関の紀要に掲載された学術論文及び書籍とした。以上の方法によって得られた結果に考察を加え，リトミックの受容史に関する研究の動向を探っていく。

2．日本のリトミック受容史に関する先行研究

我が国のリトミックに関する研究動向については，神原（2014）[(2)]によって報告されたものがある。リトミック研究において，我が国への受容史としての歴史的考察は，これまでも多くなされてきている。その中でも福嶋（1998，1998，2003）の資料と論文は，明治期から昭和初期までのリトミックの受容史を包括的に扱っており，我が国のリトミックの受容に関わった人物名を一覧できる。それに前後して，次項３－１に見られるように，日本へのリトミック受容に関わる論文がいくつか発表されてきた。また，書籍としては，佐野（1985），板野（2015），板野（2016）が発刊されている。

3．結　果

まず，リトミックの受容に関する研究論文・研究書を抽出する。

3－1　我が国のリトミック受容に関する研究論文・研究書のリスト

「国立国会図書館サーチ」における，キーワード「リトミック」（記事・論文）での検索結果は，229件が該当し，その中でリトミック受容に関する研究論文は10本であった。また，キーワードを「ダルクローズ」（記事・論文）とした際の検索結果は，82件が該当し，その中でリトミック受容に関する研究論文は３件であった。前者10本と後者３本の中には重複が２本あった。従って，検索エンジンから抽出された受容に関する研究論文は11本であった。

さらに，福嶋（2003）の資料にあるリトミックの受容年表に記述されている人物名を，「国立国会図書館サーチ」で検索して抽出した論文[(3)]と，学会誌『ダルクローズ音楽教育研究』の第24号～第42号を参照し，リトミックの受容に関わる研究論文と研究書を選出した。結果を発表年順に記す。リストアップした著作は，全て参考文献としても利用したが，表記が重複するのを避けるため，文末の〈参考文献〉には記さないこととした。なお，付番は筆者による。この部分は学会誌掲載の拙稿を参照いただきたい――以上がリトミック受容に関する研究論文・研究書を抽出した結果である。論文は28本，研究書は３冊が挙げられた。

3－2　日本におけるリトミック受容の概要

次に，これまでの日本におけるリトミック受容の概要を記す。福嶋（2003）による年表を基に，受容のあらましを追っていくが，先行研究の福嶋（2003）から15年，神原（2014）からは４年が経過しており，加筆と修正が必要となっている箇所も生じている。〈表１〉では，

受容に関する事項の最初の年，人物・団体名を示し，その後の活動を簡略に記した。また，受容した分野も示した。この部分についても学会誌掲載の拙稿の〈表１〉を参照いただきたい――結果，日本へのリトミック受容に関係した人物は26名，団体としては４団体が挙げられた。[(4)]

４．考　察

３節において示したリトミック教育の受容史研究の概要および受容の経緯をもとに，考察を加えていく。

４－１　受容の分野

リトミックの受容史研究から確認すると，演劇，音楽，舞踊，教育，音楽教育，体育，幼児教育の分野への受容が試みられている。リトミックが音楽教育法であることから，音楽教育分野への歴史的検討が多くなされているのは自明のことである。受容史としての特徴は，受容初期から他分野への応用がなされていたことであろう。その中でも，体育の分野に関するリトミック受容の史的研究は若干少ない現状にあり，今後俟たれるところでもある。

４－２　受容史研究の方法と内容の概要

本稿に挙げられた受容史研究においては，いくつかの研究手法が用いられている。

まず，本人または関係者からの聞き取り調査である。これは，リトミックの受容に関わった人物の家族や知人が，存命であることによって可能となったものである。現在，明治・大正・昭和初期のリトミックの関係者は高齢になりつつあり，オーラルヒストリーも重要な研究資料の一つとなっている。

また，当時の様子が記録されている新聞，雑誌及び日記，写真，文書，書簡等，私的な記録から分析を行う方法もなされている。本人の著作の分析もされている。さらに，研究団体がこれまで発行した会報，研究誌等も史料として使用されている。受容の研究対象が現在に近いものは，インターネットからの情報も活用されている。一方で，これまでの受容史研究では，調査票による調査，ケース・スタディー，参与観察の方法は採用されていない。

受容史研究の内容は，1970年後半から1990年代後半までは，受容史に関わった人物の半生と業績を追う人物研究が多く見られる。一方で，教育理念，音楽教育観を探る研究もなされている。2000年代前後には，小林宗作の「綜合リズム教育」や山田耕筰の「舞踊詩」を軸に，リトミックの受容の一端が検討されるようになった。また，2010年に入り，受容史研究が積極的になされるようになり，受容に関係する人物の渡欧・渡米の経緯，教育理念の検討，新たな関係者や海外からの史料の発見とその評価などが，連続して発表されるようになった。

４－３　研究対象の人物と受容史研究の論文数

リトミックの受容に関わる人物[(5)]と，その人物が関わる受容史研究として発表された論文・

研究書を〈表２〉に纏めた。人物名の後の付番は３－１のリストで使用したものである。この部分についても学会誌掲載の拙稿〈表２〉を参照されたい――リトミックの受容史研究としては，小林，天野，板野が関わる事項についての研究が多くなされていることが判る。受容史の研究は，対象となる分野，人物等が多岐に亘っているため，今後も発展的・継続的に注目されうるものであろう。

４－４　リトミック受容に関った人物別にみる受容史研究の成果

本項では受容史研究の成果の概略を，リトミック受容に関わった人物別に述べる。各人についての記述については学会誌を参照されたい。〈表２〉に纏められた（５），（９），(12)，(21）においては，リトミックの受容の流れを通史的に俯瞰し，移入に関わった人物名とその概要が述べられていることが判る。これらは更に移入史の研究を進めるための，重要なテキストでもある。しかしながら，人物名が記載されてはいるものの，詳細な調査・検討・考察を行う余地が残されていることが明確になった。

おわりに

本論では，リトミック受容史研究の有り様と先行研究の再確認を行い，新たに判明した部分や既知とされる部分の微修正を加えつつ，これまでのリトミックの重要視の研究動向を俯瞰することができた。1900年代初頭，日本人が渡欧し，異国において新たな教育法・表現法を学ぶことには多くの苦労があったと思われる。４－４の文末に述べたように，未だ検討がなされていない人物も複数名挙げられる。どのような人物が，どの分野の専門家が，リトミックに何を感じ，何を考えて，リトミックを受容してきたのかを明らかにすることは，喫緊の課題[(6)]であるだろう。

受容史の研究は，過去の振り返りと考えられがちではあるが，今，我々がリトミックの実践と研究を行っているこの状況も，いずれリトミック受容の取り組みの一つとして重ねられていくものである。昨今のリトミックの広がりを見ると，今後はインクルーシヴ教育など，種々の他分野への受容についても歴史的研究がなされる時期も来るであろうと予想される。また，他の研究団体との情報共有も必要になってくるであろう。今回はリトミック研究の全体から，受容史研究を中心に検討したが，実践と理論の両側面の研究に関しても，本学会が我が国におけるリトミックの研究の中核を担っていくことが望まれよう。

［参考文献］

・片岡康子監修（2015）『日本の現代舞踊のパイオニア――創造の自由がもたらした革新性を照射する』新国立劇場情報センター
・中山裕一郎（2003）「日本におけるリトミック研究の現状分析と今後への課題」『リトミック研究の現在』開成出版，pp.296－308

・山下薫子（2008）「日本におけるリトミック実践研究の成果と課題―『ダルクローズ音楽教育研究』及び『リトミック研究の現在』の分析を通して―」『リトミック実践の現在』開成出版，pp.163－170
・http://iss.ndl.go.jp/（国会図書館文献サーチ：最終閲覧日2018.8.29）

［註］

（１）日本ダルクローズ音楽教育学会は，日本ダルクローズ研究会の時代から換算し，通年で45年経過した。よって2018年を学会発足45周年としている。

（２）神原は日本のリトミックの研究動向を俯瞰する中で，これまでの歴史的研究について洞察している。

（３）人物名で検索すると次の通りとなる（順不動）。論文数は（　）に記した。市川左団次（26），小山内薫（123），山田耕筰（163），阿部重孝（36），伊藤道郎（13），石井漠（34），新渡戸稲造（768），岩村和雄（１），太田司朗（３），白井規矩郎（９），山本壽（13），三浦ヒロ（25），北村久雄（９），井沢エイ（０），藤村トヨ（23），高橋キヤウ（２），青柳善吾（６），小林宗作（24），天野蝶（５），宇佐美ケイ（１），谷本清（６），板野平（92）但し板野平については本人執筆・編集・監修による著作の掲載が91本，それ以外の１本は板野（2015）の著書である。

（４）福嶋（2003）の表には「1930年｜欧米の教育事情を視察した体育教師」との記述があるが，氏名及び詳細が確認できなかったため，本表では削除した。また，2003年の日本ダルクローズ音楽教育学会創立30周年，同じく30周年記念論文集刊行についても受容史研究が含まれていなかったため，選出しなかった。

（５）人物の記載は関係する論文数の降順とした。

（６）本稿の最終チェックを行っていた2018年10月には，石井漠の関係者である石井折田舞踊研究所の折田克子氏が逝去された。心よりご冥福をお祈り申し上げる。